

体育史専門領域

鈴木明哲（東京学芸大学）

1. あらまし

体育史専門領域は、体育・スポーツに関する歴史的研究を扱っている。体育史を名乗っているが、ほとんどはスポーツ史を対象にし、さらには人間の身体活動全般を研究対象にしている。現状では体育史よりもスポーツ史の研究成果がほとんどを占め、しかも近代以降が圧倒的に多い。

日本体育・スポーツ・健康学会における本領域の存在意義を主張するに際し、教育史家花井信の言を引いておきたい。すなわち「歴史観・人間観・社会観のない教育学は技術論に偏向していく。せいぜい政策批判にとどまる。あるいは逆に政策合理化の論に陥る（中略）歴史との乖離は貧困な教育学を生む」と。教育学を体育科学、あるいはスポーツ科学や健康科学に置き換えて読むことが可能である。日本体育・スポーツ・健康学会が、まずはしっかりと歴史観・人間観・社会観を保持するために本領域は存在しているのである。ゆえに、いつの時代も体育哲学と体育史の両専門領域がプログラムの第1位と第2位に位置しているのである。この二つの領域があることにより、日本体育・スポーツ・健康学会はそのアイデンティティを維持してきたのである。

2. 内外の研究動向

体育史専門領域は、1962年に設立された日本体育学会体育史専門分科会をその前身としている。専門分科会の時代、1984年に機関誌『体育史研究』を創刊し、現在、第41号まで発刊済みである。機関誌の内容は、原著論文、研究資料、特別寄稿、書評などによって構成され、特に近年は書評の充実を図っている。また編集委員会による査読システムも構築されており、学位（博士号）取得に必要なレフェリー付き論文として広く認知され、クオリティを維持している。「会報」も年4回発行され、現在、第229号まで発刊済みであり、体育史学会大会案内、『体育史研究』編集委員会報告、会員からの情報などを掲載している。

本領域所属会員の中には、国際体育スポーツ史学会（ISHPES）やヨーロッパスポーツ史学会（CESH）などに参加し積極的に国際交流を行っている。特にISHPESでの活躍ぶりは素晴らしいものがあり、本領域に最新の情報を届けてくれている。

3. 科学的知見の応用の状況

先述の「あらまし」において述べたように、本領域は日本体育・スポーツ・健康学会に歴史観・人間観・社会観を提供する、いわゆる基礎的学問領域という性質上、体育やスポー

ツの現場に直ちに応用可能な知見を提供できることは極めてまれである。しかし基礎的学問領域に甘んずることなく、今後、応用可能な科学的知見の提供に努めていかなければならないと認識している。その際、注目すべきは「問題史研究」という手法である。すでに『体育史研究』第40号（2023年3月）には、「学習指導要領から削除された組体操に関する考察—1950年代から1960年代を中心に—」と題する論文が掲載され、近年の組体操問題が強く意識され、科学的知見の応用に努めている。個々の研究成果の中に、現代の問題を投影していく研究意識が要請されてきていることも認識しなければならない。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき知見

本領域から学校体育や大学体育に直接的に活かす知見の発信はまれである。しかし、教育現場で運動内容を伝える現場教師の教育内容研究に資する素材を提供することは可能である。例えば本領域の会員らによる新井博・小谷究編著『スポーツ技術・戦術史』流通経済大学出版社（2021年3月）は、そのニーズに応じてくれる。学校体育の現場において、よい授業、よい単元の基盤形成をする際、必須となってくるのがある運動内容、すなわちそのスポーツの本質を把握することであり、その本質はそのスポーツ固有に存在する歴史に由来している。歴史に基づくスポーツの本質、あるいは楽しさを把握することにより、学校体育の現場で被教育者に伝えるべきミニマムエッセンスが確立し、スポーツ文化の正確かつ合理的な伝達が可能となる。

5. 若手研究者へのメッセージ

「体育史専門領域（体育史学会）はつまらない・・・」という若手研究者からの声がちらほら聞こえてくる。この声に対して私たちベテラン研究者や中堅研究者は真摯に向き合わなければならない。研究水準を下げてでも若手研究者の関心に寄り添わなければならない。思えば体育史専門分科会の時代から、若手研究者の「つまらない」という声は聞こえていた。オリンピックなど、マンネリ化したシンポジウムテーマの連続などに対して向けられていたように思う。若手研究者の斬新で多様な関心にたえられるよう改善していかなければならない。ある特定のテーマではなく、会員諸氏の共通項になり得る題材を提示しなければならない。旧態依然としたやり方を押しつけるのではなく、若手研究者の関心、ニーズの把握に努めたい。ゆえに若手研究者らは、「何がつまらない」のか、「どこがつまらない」のか、ベテラン研究者や中堅研究者に対して思い切ってぶつけてみてはいかがだろうか？気兼ねすることはないし、遠慮することでもない。私たち学会員は皆平等であり、一途に研究を愛する「仲間」である。若手研究者の忌憚ない批判がベテラン研究者や中堅研究者を育てるのであり、それは本領域の今後の発展、将来を左右するほどのことなのである。本領域の未来は若手研究者の双肩にかかっている。

6. 引用文献

[ホーム・体育史学会 \(taiikushi.org\)](http://taiikushi.org)

花井信『論文の手法 日本教育史研究法・序説』川島書店、2000年、140ページ。

(2024年4月24日執筆)